編集後記

昨年一二月四日、書物研の金沢大会が開催された。例年より遅い開催となったのはカニ解禁を待ったためである。

前泊すべく、三日の昼、一二時に東京の国立市の家を出た。出発前にフッと、この二月に出版予定の原稿Ａ４百枚ほどを印字し、鷲掴みにして携行した。

大宮駅までは順調に着いた。新幹線のホームに二階建て「ＭＡＸとき」が滑り込んでくる。（これで夜にはカニ……）。カニはなぜか大会当日の懇親会でなく、「前泊の晩餐のみ」との触書である。

乗車しようとすると、なんと、「強風のため特急「はくたか」は運休。運転再開の見通しはたっていません」という非情のライセンス。日本海側を暴雨風が襲っていた。越後湯沢から富山・金沢行きの電車は動いていない。改札を出、「びゅうプラザ」に並ぶ。払い戻しや振替経路に転換するための、すごい行列である。ようやく窓口にたどり着くが、東海道線経路でも、金沢行きは大聖寺辺りで止まって動かないらしい。「くそっ！　ジェフ、サンダーバードもだめか?」すでに大宮で一時間半が経っていた。

とりあえず、長岡まで行き、翌朝、特急「北陸」で行こうと思い新幹線に乗る。すると、高崎あたりで、「はくたか」が運行する……かもしれないというアナウンス。「了解。ダン・マシューズ隊長！　越後湯沢で緊急下車します！」。だが、電車は一時間以上も遅れて到着。乗車するが一時間動かず。ハンス・カトルプの心境。

ようやく動きだしたものの、糸魚川まで何度も停車して、すでに夜九時を回っている。頭のなかで、カニの足が一本ずつ減ってゆく。午前中に東京を出たグループや小松空港班にメールをすると、「もうカニはありません」。電車は三時間半遅れで、ようやく金沢に着いた。深夜一一時近くになっていた。救われたのは、とりあえずのつもりで携行した原稿をすべて読み切ったことである。

寺島蔵人邸

金沢まで来て、カニもない。巡見もない……となれば、否応なく大会報告に期待が高まる（あ、報告が主役です）。

翌日、米沢藩研究者の小関悠一郎氏と偶然同じ片町のホテルだったので、誘いあわせ、午前中、寺島蔵人邸を見に行く。蔵人は加賀藩の民政官である。藩の方針を批判し、天保八年（一八三七）に能登島流刑となり生涯を閉じた。その生涯は、大会に出席されていた長山直治氏の『寺島蔵人と加賀藩政』に詳しい。

庭園や浦上玉堂が滞在した部屋、茶室、また蔵人の絵画・鐙などを見学。とても四五〇石取りの邸宅・趣味とは思われないのに驚く。

蔵人邸を後にし、小関氏と、同じ知行高でも、金沢藩は特殊な事情があるのではないか？　映画化された『武士の家計

花の慶次、風雲・金沢城天守閣を遠望す

簿』の世界は一般化できるのか？いや、武士の家計簿なぞよりも、この本の著者の家計簿が見たい……と話しながら、大手門より金沢城内に入る。「こりゃ広いね～」と天守閣を遠望しつつ大会会場へ向かう……つもりで壕を渡って外に出ると、いもり坂口に出た。会場からずいぶん離れている。競歩ペースで、開始一〇分前に着いた。

会場は尾山町の石川県文教会館である。地方大会は大会主催者が仕切ってくれると思いきや、司会をやることになっていたらしい。「なにをボヤボヤしてたのか！」との叱咤。「なにしろ、加賀百万石。城が広くて……」。

ほぼ定刻どおり、午後一時に高橋明彦氏による挨拶が行われ、大会がはじまる。報告者・内容は「活動記録」を参照されたい。例会は二人の報告が通例だが、地方大会では数名になる。盛りだくさんの内容で楽しい。だが、例会と違い、報告時間の制限とエンドレスの質疑応答ができないのは惜しい。

「字姿」をこよなく愛する岩坪充雄氏の熱弁

なかでも、フルマラソン・ペースの報告に対し、ハーフマラソンの時間しか用意できず、レジュメの半分、城下町・加賀の賑わいと芸能を残して時間切れとなったのは無念である。残りは東京例会で報告されるらしいのでホッとする。

懇親会場は「ＫＫＲホテル」。金屏風が眩しい立食パーティ会場。ここでも司会をやれ。「カンベンしてくださいよ、それでは飲めない」ので、新婚の小関氏、町年寄研究者の望月良親氏に代わってもらう。やがて恒例の全員自己紹介が始まる。自分の番になる。怨霊・妖怪研究者の木場貴俊氏に「壇上でコケたり、マイクに頭突きしたりしないでくださいよ」と念を掛けられる。無意識にそのとおり身体が動いてしまい、会場が凍りついた。

一次会が終わり、「地のものを食べてないね」「二次会は地の魚介、さかなクンを！」という声が。しかし、気がつくと行く先を告げずに金沢駅方面に数台のタクシーが逃走。「むむ、そうくるか。いざいかん、マッコイと野郎ども！」、片町方面の若手に混ざり歩いていた。

頼りになるのは、金沢大出身の一橋大院生・北村君。「君だけだ！」。たどり着いたのは、「うつのみや書店本店」付近の居酒屋。店内は地元客でごった返していた。何かやってくれそうな雰囲気。

期待は裏切られなかった。陰陽道研究者の千と梅田千尋氏や大会報告者の工藤航平氏らに、「これだ、こんな店来たかったんだ！」と雄叫びを上げつつ、揚げ足を取ったり取られたりしながら、地酒・地魚介を味わい尽くし大満足した。さて、今年の地方大会はどこか。（小川記）